村史こぼれ話１１

石油業界の弥彦神社信仰

弥彦神社参道手水舎前に石油精製蒸留釜があることはあまり知られていない。

この釜は「明治１７年（１８８４）頃、新潟県出身の田代虎次郎により考案された「二十石蒸留釜」とよばれるわが国最初の石油精製装置である。原油を締め切った釜に入れ、下から熱し、原油から蒸発するガスをパイプで水中を通して冷やし、液体にする簡単な構造であり、わが国では２基しか現存しない貴重なものである。平成１３年３月に柏崎の日本石油加工㈱柏崎工場より奉納された」（現物説明文より）という。

弥彦神社と石油業界は歴史的にはどんな関わりがあるのだろうか。

石油が日本の歴史に登場するのは天智７年（６６８）で、近江大津宮に「越の国、燃ゆる土と燃ゆる水とをたてまつる」（「日本書紀」）とある。石炭やなどを「燃える土」といい、臭い水、といった原油は「燃える水」と呼ばれた。今でも長岡市町や新潟市（旧新津市）町・阿賀野市（旧安田町）という地名が残っている。

明治維新・文明開化になると石油の需要が急増し、アメリカからの輸入に頼ると同時に国内での石油採掘の増大が求められた。明治６年（１８７３）、尼瀬（出雲崎町）で県内初の機械による掘削が行われ、年々増産された。その後日本石油（内藤久寛）、宝田石油（山田又七）が設立され、中野貫一もまた新津油田を開発しその名を高めた。

越後の石油産地は蒲原・三島・刈羽・古志の各郡内で、それらは弥彦信仰の地域とほぼ重なっている。関係者は石油を掘るにあたっては、まず弥彦神社に祈念して発掘の成功と工事の安全を願った。その結果、弥彦神社は石油の守護神となり、その信仰は秋田県をはじめ県外にも広がった。戦後になって海外での大規模な石油発掘が始まると、例外なく第一に弥彦神社に参拝して祈願するなど、今でも石油の守護神として大きな信仰を集めている。

村内には石油関係の石造物として、神社外苑弥彦公園の「殉職者追悼之碑」（大正６年建立）・「田代虎次郎顕彰碑」（大正７年）・一ノ鳥居前の燈籠１対（昭和５１年）がある。

（資料提供弥彦神社、毎日新潟支局発行「弥彦風土記」参照）